

---

# 妖精と王子の話

春の七菜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

妖精と王子の話

### 【Zコード】

Z1980C

### 【作者名】

春の七菜

### 【あらすじ】

昔々あるところに、妖精の女の子と人間が妖精の森を目指して一緒に旅をしていました。しかし、妖精の森がもう目前に迫ったその時、人間が大勢の人間に連れさらわれてしまいました。妖精の女の子が小さな体で奮闘するお話です。

## 妖精と王子の話 前

「英雄王子が行方不明らしいぞ」「英雄王子って・・・ああ、あのビルニアを追い出したとき指揮官してた王子のことか?」「またかあ?」

「名前は・・・フラン王子だつけか」「そうそう、フラン王子だけに、ふらふらしてるんじゃないの」「ふらふら王子ってか!」

がははは、おもしれえ!と酔っぱらつた人間たちの笑い声が響く。さつき私たちがいたときも同じこと喋つてたじやない。何度も全然面白くないわよ。咳いた声は誰にも聞こえない。それもまた面白くなくて、いろいろする。私は今、機嫌が悪いのだ。大勢の酔っぱらいたちの間をすり抜け、私は小さく開いた窓から外に出た。

外に出てから、光の漏れている、人間の部屋の辺りを振り返る。そして、ふいつと目の前の森に向かつて飛び始めた。

「もう、知らないんだから!」

\*

\*

\*

事の発端は、とってもとっても小さなこと。

夕食を済ませて部屋に戻ると、宿屋のおばさんから、おまけだよつてもらつたりんごのパイ。半分残しておいてつて言つたのに、私がよそ見をしている間に人間がべろりと半分以上食べちゃったの。もう、もう、もうー楽しみにしていたのに！それなのに人間、謝りもせずなんて言つたと思う！？

『どうせハニィは半分も食べられないでしょ』

きい  
！！

そうよそうよ、自分の体よりも大きなものなんて食べられなくて、半分残してもらつても結局食べれなくて、残りをいつも人間に食べでもらつていたけど。でも、これは気持ちの問題なの！

森に向かつて飛んでいたけれど、途中で見つけた切り株に腰を下ろす。そして、切り株から生えていた小さな葉っぱにたまっていた滴をそつと口に含んだ。のどを流れる冷たい水が、体も頭も少しづつ冷やしてくれる。

どうしても怒りが収まらなくって、叫んでわめいて出てきちゃつた私。確かに、私も大人げなかつたけれど。出でくる直前のやりとりを思い出す。

『森はもう直前なんだし、一人でお帰りなさい』

『・・・いいわよ、じゃあ一人で帰るからーさよならー』

売り言葉に買ひ言葉。・・・なんで、なんで、そんな事言つのよう。・。・。冷たい目と冷たい言葉がよみがえつてきて、体がぶるつと震える。膝に顔を埋めた。

いつもならそんなこと（「ザート半分以上食べたり）しないし、約束を違えたときだけ、『ごめんなさいね！悪気はなかつたのよ！』とかなんとか、謝り倒そつとするのに。いや、そこまでしなくとも良いんだけど。でも。

これまで、何ヶ月もずっと一緒に、人間だけど……友だち以上に仲良くなれたと思ってたのに。

人間の言つとおり、明日明後日には到着できるくらいアスランダルの森の近くまで来ている。妖精の嫌う人間を連れて行くのはちょうどだけ勇気が要るけれど、でも妖精の長であるお父さまにこれまでのことお話しして、人間だけ命を助けてくれた恩人で、お友だちなのよつて胸をはつて紹介しようと思っていたのに。

最後の最後で、どうして喧嘩しちゃうのよ……。悲しくなつて、涙も出そうになつて、ぎゅっと体を縮こめたその時。

「…………？」

「…………何だろう。宿屋の方がなにやら騒がしくなつてきた。…………何か、胸騒ぎがする。」

何が起こっているかも分からなければ、とにかく戻らなきや。体を起こし、宿屋の方に向かう。向かえば向かうほど、どんどん騒々しくなつてくる。やつと宿屋が見えてきたとき、そこには宿屋と共に、大勢の……騎士つて言うのかしら、武装した人たちが宿屋を取り囲んでいるのが見えた。普通の人間には多分見えないのだろうけど、一応手前の木の陰に隠れて何事かを窺つ。

人間は、人間は大丈夫……？

先程見たばかりの、人間の泊まっている部屋を見るけれど、明かりがついていない。もう、寝たのかしら？これに巻き込まれてさえいなければいいのだけれど。木の幹をぎゅっと握りしめる。何事が起こっているのか未だに分からず、何もできない。

息を呑んで見ていると、宿屋の中から数名の騎士たちが出てくるの

が見えた。そうして、近くに止めてあつた馬車に一人が乗り込む。

「…………」

今乗り込んだのは、騎士じゃない。暗くてよく見えないけど……  
あれは。

「人間……！」

どうして、どうして、どうして？な、何が起こっているの？…  
いえば……人間は素性を全く明かしてくれなかつた。もしかして指  
名手配されてたり……実はお尋ね者だつたの！？  
ああ、どうしよう！

こんなに焦つている間も、騎士たちは宿屋の取り囲みをといて馬に  
乗り、出発準備に取りかかつてゐる。  
馬車も、今にも出でてしまいそう。

後ろを見る。到着目前のアスランダルの森のにおいがする。後ろの  
小さな森を抜ければ、私の故郷の森。そこを目指して、こんなに、  
こんなに長い月日をかけてここまで來たけれど。

迷つてる場合なんかじやない。

「…………待つて！」

真っ直ぐに馬車を追いかけた。

\*

\*

\*

馬車の中までは入れなかつたけれど、外側にちょいとポケットのようになつてゐる部分があつて、こつそり入り込めた。どこへ行くのかは全く分からなくてちょっと怖いけれど、ついて行くしかない。風が強く当たつて、目が開けられない。ぎゅうっと目を瞑り……。次に目を開けたら、そこは宿屋の近くでもなく、全く覚えのない建物の中だつた。

「……えつ、あら……？」

やだ、寝ちゃつてたんだわ！あんなに緊迫した雰囲気で、よく私つたら……！

誰も私のことなんて氣にはしていないけれど、ちょっと恥ずかしくて頬に手を当てる。そこで、はつと気がついた。  
そうだ、私が今しなきゃいけないこと！

「人間！」

人間探しをしなきゃ！

・・・人間、つて搜すのもなんだか変ね。名前、聞いておけば良かつた。

だつて、二人でいるときには、ねえ、とかあなた、つて言えば振り向いてくれるから、名前を必要としなかつた。ああ、でも。人間はいつも、ハーネル、とかハニィって愛称で私のことを呼んでいた。  
捜しだして、会つことができたら、名前を聞いてみよつかしい。

そこまで考えて、辺りをぐるつと見渡す。周囲には、自分が隠れていたものの他にも、馬車がずらり。馬車を閉まっておく小屋、な

かしら。じゃあまずは外に出なきや。

朝日が入り込んでいた隙間からするつと外に出る。『ういうとき、自分の体が小さくて感謝するのよね。

外に出て、周囲を把握しようと顔を上げると、そこには今まで見たこともないような大きな石造りの建物。一番てっぺんまでは、首をどんなに後ろに曲げても見ることがかなわない。これが・・・。

「・・・お城？」

人間と旅をしながら、貴族の家とか、その土地の領主の家とか、色々な立派な建物を見てきた。でもそのどれよりも一回りも二回りも・・・ううん、全然比べものにならないくらい大きい。話で聞いたことしかないけれど、お城というのはこんな感じじゃないかしらと思う。ええっ、じゃあもしかして人間はお城の人に捕まっちゃったの！？そんなに大悪党だつたの！？何しでかしたかは分からぬけれど、でも本当はとっても良い人間なのよ！あれから何時間経つたのかしら、こつしちゃいられないわ、早く助けないと！

あまりに大きすぎてどこをどう捜せばいいのか分からないけれど、とりあえずパツと目に入った随分と高い位置にある大きな窓を目指して羽を動かした。

ぶつす

「フラン、ふてくるのも分かるが、おまえがいけないんだろう

？」

「何がいけないって？ 戦だつて終わらせたし、好きにやれりよ」「好きにって……確認しておぐが、おまえはこの国の王子なんだぞ？」

「第7王子、正確には権力もほどんど持つていなければね。政は兄上たちがすればいいし、……約束したじやないの、戦を終わらすことができるなら自由に過ぐしていいって。私がどれだけ頑張ったと思つてるの」

「約束はしたが、あの敷地から出でることを許してないし、王子を止めていいとも言つてない」

「王子は止めたつもりはないけど……まあ、止めさせてくれれるならそれはそれで有り難いんだけどね。あの敷地から出でちゃダメとも言われてないわ」

「言つたぞ！」

「『あの家で好きなように過ぐして良いが、住居を王城からあの家に移すところだけで、王城には仕事に登つてこ』とは言られたわ。だからちぢゃーんと毎日お仕事しに来てたんじゃない

「……じいじぱらく顔を見なかつたが？」

「だつて監督しなくても、兵は自主的に鍛錬してるし、騎士隊長のロディもマローもアッティルも大分腕上げてるしやる気に燃えてるし、私なーんにもやることないんだもの。暇で暇で。だから、じゃあ何しようかなーと思つて、ああじゃあ国様子を自分の田で見るのも大事な王族の仕事よね！ なーんて」

「思いついたわけか……おまえがいなくなり、どれほど騎士隊が意氣消沈したと思つていいんだ。騎士隊長のロディもマローもアッティルも確かに腕を上げて、兵もおまえが監督しなくとも自主的にやる気に燃えていたのは事実だろうが、それもこれも、あのビルニア国との争いでのおまえの武勲に感動し、おまえと手を合わせたい一心ではりきつて励んでいると聞くべや。それなのに当のおまえがいなくなつてどうする…」

「あらいやだ、私男には興味ないの。それに暴力は好きじゃないのよ、他を当たつてちょうだい」

「女口調のくせにけんかつ早いおまえが言うな！・・・まあ、言い分は分かつた。だが、せめて誰ぞに言い置いてから行け！おまえが忽然と姿を消してからどれほど騒ぎに・・・どれくらいの月日が経つたと思っているんだ！」

「ええと、8ヶ月くらい？」

「9ヶ月と14日だ！」

「わああ。数えてたの？相変わらず細かいわねえ」

「・・・反省しろーーー！」

・・・・・ええと。

見つけた。のは良いんだけど、出て行けるような状況じゃないみたい。カーテンに思わず隠れちゃった。

とりあえず、人間は捕まつたのじゃなくて・・・話の内容からするに、ええと、人間って、この国の、第7王子？

私が介抱してもらったあの家、あの家から毎日どこかへ出かけていたのは、このお城に仕事に来ていたってこと？・・・ビルニア国軍を追い出した王子つて、もしかして、この人間のこと？

・・・ああ、私つたらとんでもない人間と関わっていたのかかもしれない。とんでもない場所に来てしまったのかも知れない。

バタン！と大きな音がする。ハツとそちらを見ると、恰幅の良いおじいさんが入ってきたところだった。

「フランー」

「父上！遅くなり申し訳ありません、只今連れて行くところでした  
「良い、良い、早く顔を見たくてな。久しいな、フラン」

「…………」  
「ご無沙汰しております、父上」

あれが、人間のお父さん？ってことは、……この国の王様！？

「アスランダル地方にいたと聞いたが？」

「……妖精の森がどうなったか、この目で見たかったので  
「愛馬フイースを連れて行かなかつたな、どうして徒步を選んだ？  
「フイと行けばもちろん早く着いたでしょうが、町や村の様子も見  
て回りたくて。……まあ、森にたどり着く前に連れてこられたの  
で森を見ることはかないませんでしたけどね」

「一つこつと音も聞こえてきそつなくらいの満面の笑み。  
わあ・・・人間が嫌みを言つてるなんて。貴重な光景だわ・・・。

「ああそれでは悪い」とした、おまえに言いたいことがあつてな  
「父上は何も悪く・・・」

「あら、言いたいことならわざわざ手間を掛けて連れてこなくたつ  
て良かつたんじゃありません？」

「おまえも！まずは黙つて城をあけたこと、父上に謝れ！」

「…………まあ、私ごときがいなくなつても誰も構わないと思  
いましたのでつい。手間をおかけして申し訳ありませんでした」

「父上に喧嘩を売つているのか！」

「いやあね、売つてるわけないじやない」

「……フラン、おまえな、父上の前でそのよつな言葉遣いは、  
「直さないわよ」

「フラン」

「……・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・・はいはい、分かったよ、直せばいーんでしょ」

「・・・・・・」

仲が良いのか悪いのか分からぬ。私の前ではずっと穏やかだった人間が、家族の前ではこうなるのね。不思議な感じがする。

「そうだなあ、そろそろその言葉も直してもらわねばならん」

「今まで何も言つてこなかつたのに、今更?」

「おまえに大事な話がある、フラン」

「・・・・・・」

「ウイードル、おまえにも聞いてほしい」

「・・・父上?」

大事な話つて、どんな話? ぐくっと唾を呑む。思わずカーテンをぎゅうっと強く握りしめる。

「誰だ!」

頭すれすれに小さなナイフが通過していく。ナイフは頭の上のカーテンを切り裂き、そのままテラスにカラーンと落ちた。

頭が真っ白。今、何が起きた?

動くことができない。自分の意思では指一本動かせないのに、体が勝手にどんどん震え始める。

あとちょっとでも下だつたら。体が真つ一つの自分の姿を想像して、また大きくぶるつと震えた。随分前に治つたはずの古傷が、緊張のためかわざかに痛む。

「・・・おかしいな、風もないのにカーテンがわずかに動いた気が・・・」

「人間には届かぬほどわずかな風があったのではないか？もしくは鳥か・・・。のう、フラン。・・・フラン？」

目の前には、カーテンに近づいてくる、ウイードルと呼ばれた人間。私の上に視線を乗せても私を見ることはできない。私に気がつかない。カーテンを調べる様子をぼんやりと眺めながら、ああ、私はここにいてはいけないんだと思う。

今頃になつて気づく。喧嘩もしたことがなかつた私たち。あと少しで森に到着というところで、私に初めて見せた冷たい表情、冷たい言葉。

『森はもう目前なんだし、一人でお帰りなさい』

あれは、酔っぱらいたちのうわさ話から、近々自分がこの城に連れてこられることが分かつて、わざと私を冷たく突き放して帰るよう仕向けたんだ。自分の事情に巻き込まないように。

帰る場所は、私も、人間も、違う。そんなこと分かつていたのに。森へ連れていつて紹介して、そこまでしか考えていなかつた。どこかで、ずっと一緒にだと思ってた。・・・ううん、違う。本当は人間と別れなきやいけないことを知つていたけど、怖くて考えないようにしていただけ。そして今回のことば、別れるのが少し早まつたというだけのこと。人間は、自分の帰るところに帰つただけ。ここは人間が帰る場所、私がついて来ていい場所ではなかつた。

きっと、人間には私が人間と別れがたく思つてゐること、知つていたんだわ。だから、実は自分は王子でお城に帰らなきやいけない、なんて言つても私がなかなか離れられないだろうと思つて、けしかけるようなあんな言葉を。私が出で行く寸前に振り向いたときに見

た、痛みをこらえるよつなの瞳を思い出す。

ああ、あんな自分も傷つくような演技までして私を帰そうとした人間の思いを無駄にしちゃいけない。

どうにか体を動かして、人間たちに背を向ける。帰らなきや。どこに？森に。人間がないのに？人間の隣のように・・・森にあんなに居心地の良い場所なんてないのに？理解はしても、心が納得していない。だけど、納得できなくて帰らなきやいけないの。

だめだ、頭がぐちゃぐちゃで涙が出やつだ。見えはしないよつだけど、気配に聴いらしいウイーデルに今度こそばっさりやられないうちに、とにかくこの場を去らなきやと飛び立とつとしたとき。

「ハニィ！？」

ああ。今度こそ、涙がぽろんと落ちた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1980u/>

---

妖精と王子の話

2011年10月9日07時36分発行